

ギリシア七賢人の筆頭に数えられ、哲学の祖とも言われるタレスは、紀元前六〇〇年から五〇〇年頃、ミレトスという商業都市に生まれ育ちました。

日蝕を予言するなど天文学に長け、オリブ油を絞る機械に投資して財を成し、また政治の世界にも深く関与するなど、様々な経歴を持っています。しかし残念ながら本人の著作は残っており、数々の伝説や逸話のみが現在にまで伝えられています。

その中の一つに、愛弟子との次のような問答があります。

弟子「人生で一番難しいことは？」

タレス「自分自身を知ること」

弟子「人生で一番易しいことは？」

タレス「他人を批判すること」

弟子「人生で一番楽しいことは？」

タレス「目標を立てて挑戦すること」

二五〇〇年以上を経た現代に生きる我々にも、そのまま当てはまる箴言でしょう。

最初の二つの問答では、自分自身を客観的に捉えることの難しさと、たやすく周囲や環境を責めてしまいがちな人間の姿勢を、明快に喝破しています。

倫理法人会で学びと実践のベースとなっている『万人幸福の栞』に記されている生活上の様々な徳目も、「全て矢印が個々の自分自身に向いている」と言います。言い換えるなら、「倫理は他人を測るものさしではなく、自己を倫理実践に誘い、自分自身が

目標への挑戦こそが 人生の醍醐味！



少しでも向上するための羅針盤である」ということです。

そして、三つ目の「目標を立てて挑戦することが、人生で一番楽しいこと」については、誰もが納得するでしょう。せつかく与えられた一生を、目標もなく無為に過ごしていたのでは、この世に生を享けた意味がなくなってしまう。

目標を掲げて挑戦する大切さを、次のように表現する人がいます。

「富士山登頂を果たし、その頂上から雲海を眺め、達成感と心地よい疲労感を味わっている人々の中には、休日に家の近所を散歩していたら、ついつい富士山頂まで来てしまった！」という人はいない」

目標を完遂できた人は、常に明確な目標を掲げ、その達成時の喜びをイメージした人です。厳しい状況の時こそ、いよいよ自分自身を鼓舞する強固な信念が不可欠であり、間違っても「こうなったらいいんだけどなあ」といった軽い気持ちで、ある一定以上の目標を完遂した人はいないのです。

暑い八月、我ら倫理法人会においては、年度の締めくりとなる大切な月です。賢人タレスの言葉を噛み締めて、自分自身をしつかりと見つめ、他人や周囲の環境に責任転嫁せず、自ら掲げたその目標に向かい、最後の最後まで挑戦し続けましょう。

持てる力を出し惜しむような微温低調な生き様では、自己の存在意義を自ら貶めていることになりません。

「世に生を得るは、事を為すにあり」です。